聖霊降臨節第３主日　説教 「イエスの嘆き」要旨

牧師　黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会　2024 年 6 月 2 日

マタイによる福音書　23:13-28

聖霊降臨日に続いて三位一体主日を共に過ごした私たちは、三位一体の神様との交わりの中に置かれていることを覚えつつ、こうして主の日の礼拝へと集められて参りました。そして、その私たちが、今、心に刻んでいることは、この三位一体の神様との交わりというものが人間の知性、その力を超えた、言葉では到底言い表すことのできないものだということです。従って、この計り知れないものに触れているとの実感は、私たちに神様を畏れ敬う気持ちを湧き起こさせます。そして、この聖なるものと直接触れ合っているとの畏れは、この世にあって私たちの信仰をより具体的で現実味のあるものとさせるのです。それが、私たちがこうして今献げている礼拝の中で起こっていることでもありますが、従って、礼拝とはすなわち、私たちにとっては神秘体験そのものであるということです。なぜなら、主の日の礼拝を共にするということは、主の復活を祝うと同時に、主が復活されたがゆえに、父と子と聖霊なる神様との交わりにあることを知らしめる時と場でもあるからです。そして、それが毎週毎週私たちには許されている、このことはつまり、この神様の神秘は尽きることなく湧き出でる泉のように私たちを潤し、さらには、その私たちが礼拝から世に送り出されるということは、その私たちを用いて、神様が世を潤そうとしているということなのです。

このように、まさに神秘というほか表現しようもない出来事が私たちがこうして献げている主の日の礼拝で起こっているわけですが、ですから、新約聖書においてこの三位一体の神秘が語られる場合のほとんどが弟子たちの派遣という主題で語られているのはそのためです。それは、三位一体の交わり、その神秘というものが私たち信仰者だけに限定されたものではなく、世のすべての人々、人類すべてを救いへと導かんとする、この世界に注ぎ出される神様の御心でもあるからです。そして、そのために大きな働きをなすのが聖霊なる神様でありますが、それゆえ、聖霊はその動きを止めることはありません。あらゆる時、あらゆる場所で世にあるすべての人々、すべてのものに働きかけ、従って、我が国にキリスト教が宣べ伝えられるその以前にも、また神様と私たちとが出会うその以前から、私たちの生きるこの国で、また世界のありとあらゆるところで豊かに働いていたのが聖霊なる神であるのです。ですから、この「三位一体」というこの言葉が「十字架」と「復活」という言葉と同じように、今日、私たち日本の社会において確固たる地位を築いているのは、まさしく聖霊の働きゆえのことだとも言えるのです。

しかし、もちろん、こうしたもの言いには、かなり注意が必要です。なぜなら、すべてのことを聖霊の働きに集約することは、聖霊を人間の管理下に置くに等しく、従って、その都合のいい理解の仕方が行き過ぎた場合には、私たちの信仰の根幹を返って歪ませることにもなるからです。そのいい例がいわゆるトランピズムと言われていることでもありますが、ですから、そうならないためにも、私たちは、聖霊の導きに委ね、御言葉から神様とイエス様の御旨にしっかり聞いていく必要があります。では、その私たちの心に、不幸だ、災いなるかなと繰り返し何度も語りかける、一見するととても分かりやすい、この日の御言葉はどのように聞こえてくるのでしょうか。

ここでイエス様がやり玉に挙げているのは、律法学者、ファリサイ派の人々でありますが、しかも、それは他に類を見ないほど激しいものです。それこそ、彼らのなすことすべてを否定しているかのように見えます。いや、実際に彼らのなすことすべてを否定しているのがこの時のイエス様でもあるのです。それは、ユダヤ社会において神様に最も近いと目されている人々が、最も神様から遠い現実に身を置いていたからです。そこで、そのイエス様の一つ一つの発言から彼らの行状を見ていくと、イエス様が彼らのことを次のように思っていたことが分かります。①自分は入ろうとしないだけでなく、人々のことをも天の御国から閉め出そうとしている。②伝道のため、熱心に世を巡って人を信仰に導いておきながら、その人が改宗するやいなや、自分よりも悪い、地獄の子としてしまう。③偶像礼拝を否定しておきながら、それに等しいこ

とを自分たちは行っているが、だから、そのやることなすことすべてにおいて、御言葉が大切にしている正義、慈悲、誠実は踏みにじられ、それゆえ、その信仰は見てくれの、見るも無惨なものとなっている。
と、このようにイエス様は容赦ない批判を律法学者、ファリサイ派の人々に浴びせかけるのですが、その激しい様子からも分かるように、それがイエス様の本音であったということです。
　ですから、それがイエス様の本音であるだけに、私たちも納得することになります。そして、その納得とはつまり、あいつらは悪い奴だ、というこの思いであり、また、自分たちの信仰は間違っていない、正しいんだとの思いでもあるのでしょう。そして、恐らくは、この御言葉に聞くすべての人々も、きっと私たちに近い気持ちになるのでしょう。特に、宗教に対する抵抗感を強める昨今においてはなおのことです。それは、ここでイエス様の仰っていることがそれだけ分かりやすいものでもあるからです。ですから、そう考えるならば、このように仰るイエス様の思いとは、イエス様がその発言の度に「律法学者、ファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸である」と語っているように、律法学者、ファリサイ派の人々の欺瞞とその偽善性を明らかにすることであり、それゆえ、この日の御言葉が語られているその目的は、私たち信仰者を彼らのようにはしたくない、そういうことにもなるのでしょう。しかし、そうであればこそまた思うのです。
　ここでイエス様が怒っているのは誰の目にも分かります。それゆえ、そうなってはならないということも分かります。けれども、イエス様の仰ることを別の角度から見たらどうでしょう。イエス様がここで仰っていることは彼らのやっていることの悪辣さについてでありますが、ただそれは、イエス様の目にはそう見えたという話であって、客観的にいえば、それも一つの評価に過ぎないということです。ですから、ダメだダメだ、というところから一旦離れて、フラットに彼らの行状を見ていくと、そこにはまったく別の姿が見えてくるように思うのです。それは、彼らユダヤ教の伝道活動の前進とその成果です。この世において、その信仰が評価され、彼らは確実に実績を残すことになったということです。なぜなら、もし彼らがそのように実績を残すことがなかったなら、イエス様がここまで激しい言葉を投げつける必要もなかったからです。しかし、もちろん、だから、彼らのやっていることが正しくて、イエス様はそんな彼らの成功を妬んで、こんなことを言っているんだ、などと申し上げるつもりもありません。そういうことではなくて、そういう見方もできるということを言っているだけなのですが、しかし、それだけにまた、救い主である私たちのイエス様が、彼らが自分の気に入らないことをやっているからといった、そんな単純な理由で怒りに任せて激しく彼らのことを罵っているとは思えないのです。
　イエス様の言葉の激しさゆえに、人はどうしても二項対立の図式でイエス様のお言葉を理解しまうのでしょう。しかし、自分はイエス様の仰るようなことを絶対にやっていないし、これからも絶対にやることはない、だから、自分とはまったく関係ないと、どれだけの人が果たしてそう言いきることができるのでしょうか。もちろん、恥を知らなければ、そう言い切ることは実に容易いことです。けれども、馬脚はいずれ現わされるものです。そこでイエス様が何に怒っているのかをもう一度振り返りますと、それは、律法学者、ファリサイ派の人々が正義、慈悲、誠実を蔑ろにし、その内側は不法、偽善にまみれているということです。つまり、イエス様が先に仰ったことから考えると、神様への愛と隣人への愛を、彼らが信仰というものを盾にとって踏みにじっているということです。それゆえ、この矛盾にイエス様は怒りを爆発させたわけですが、ただ、それについては、詳細に何かを語るまでもなく、自分自身の胸に手をあててみればよく分かることです。つまり、イエス様の仰っていることは、他山の石ではすまされないことだということです。
　しかし、彼らとその私たちがまったく同じかというとそうではありません。彼らと私たちとでは明らかな違いがあり、それゆえ、まったく別物と言ってもいいのです。そして、それが私たち藤沢教会でもありますが、では、その違いとは何か、それは、彼らとは違って、私たちが三位一体の神様との交わりの中に置かれ、しかも、私たちにはそのことがよく分かっているということです。まただから、イエス様がここまで怒りを爆発させているわけですから、怒られまいとして、言われていることに何が何でも応えようとするのです。そして、それ

は、そうすることが私たち信仰者の責任ある振る舞いであると考えるからです。しかし、そもそものところで言えば、責任を果たすということはどういうことなのでしょうか。そのために私たちは御言葉を通して詳しく説明を受ける必要があるのですが、では、あれこれと説明されて、果たしてどれだけの人が本当にしっかりと自分の責任を果たすことができるのでしょうか。その体裁を整えることはできたとしても、まさに弟子たちがそうであったように、完全な意味で神様への愛と隣人への愛を貫き通すことなどできないのです。ちなみに、聖人とされたマザーテレサも、その点においては、私たちと何一つ違わないものでありました。

彼女はある神父宛の手紙の中でこんなことを言っています。「私の魂の中で神の場は白紙です。私の内に神は存在されません。神を欲する痛みが非常に強いので、私はただただ神を求めるのですが、私が感じるのは、神が私を望まれないことです。神は不在です」と、また、別の手紙の中ではこうも語っています。「私はたった一人です。闇はそれほど暗く、私は孤独です。望まれず、放棄された者、愛を求める心の孤独感は耐えられません。私の信仰はどこに行ったのか。心の奥底にも、空虚と暗闇以外には何もありません。神よ、この未知の痛みはなんと辛いのでしょう。その傷みは絶え間なく続きます。私の信仰はなくなりました」と、このように自らの正直な思いを切々に述べているのです。それは、その手紙の文面からも分かるように、聖職者である以前に、神の御前に置かれた一人の人間として生きることに疲れ、痛みすら感じていたのが聖人と言われているマザーテレサであったからです。ですから、修道誓願をし、神様に仕える道を選ぶということは、そして、私たちにとってそれはそれぞれに与えられた信仰の道を歩むということでもありますが、このように責任をもって信仰の道を歩み続けるということは、マザーテレサほどの人をしてもなお、それだけ厳しいものであったのです。

こうして、イエス様のこの日の言葉はますます私たちの胸に深く突き刺さることになるのですが、それゆえ、御言葉に忠実であろうとするその責任感が、ある意味でマザーテレサと同じように、私たちをしてその同じ心境に追い込むことにもなるのです。ですから、このイエス様のお言葉は、もしかしたら、私たちをそのような境涯へとあえて追い込むために語られているとも言えるのでしょう。まただから、そのようなとき、私たちは信仰によってその苦しみから逃れたい、そうした苦しみを遠ざけたい、私たちの誰もがそう願うのです。しかし、そう願いつつも、それが叶わないことを私たちは知っているのです。ですから、信仰というものは、マザーテレサをして明らかなように、そういう意味で非常に据わりの悪いものだということです。では、この据わりの悪さをどうすれば、据わり良くすることができるのでしょうか。ただ、そのマザーテレサが、私たちが知る、あの大きな働きをなすまでになったわけですから、彼女の姿から何かを学び取ることができるのでしょう。そして、それがそれぞれに与えられた責任を果たすということでもありますが、しかし、先ほども申しましたように、果たしてそれで本当に据わりの悪いものを据わりよくすることができるのでしょうか。

そこで、私たちとマザーテレサとの違いに目を向けますと、あることに気がつきます。それは、彼女が自分自身について正直に語っているということです。それゆえ、この正直さは私たちも見倣う必要があります。しかし、いわば自分自身の恥とも言えるその内側を正直に誰彼なく、ましてや神様に告白することなど、私たちに易々とできることなのでしょうか。しかし、彼女はそれをやってのけたわけで、また、彼女だけではなく、私たちの中にもマザーテレサと同じように、神に背く自らの姿を真っ正面から見つめ、正直にその思いを明らかにすることのできる人はいるのです。それは、一人祈りの内にということなのかもしれませんが、では、祈るということはどういうことなのでしょうか。それは、善悪を知る知識の実を食べたアダムとエバが、神様の呼びかけに対して身を隠したように、私たちが神様からその身を隠すことではありません。身をさらし、すべてを見てもらうことであり、ですから、このことは、この世的に考えるならば、ある意味で恥知らずな行為だとも言えるのです。そして、それが祈りというものの本質でもありますが、では、それにも関わらず、私たちが祈るのはどうしてなのでしょう。それは神様が望んでおられるからです。そして、私たちがそれを知るのは、三位一体の神様との交わりの中にこうして生かされているから

です。まただから、イエス様は本気で、荒々しいまでにその本音を私たちに語ってくれているのです。

ですから、イエス様のここでの荒々しさは、私たちが神様の御前に置かれているからであり、つまりは、身を隠しようもない神様の御前にあるからこそ、神様の奥義、その神秘を私たちはイエス様から直接こうして聞いているのです。それは、その荒々しさを知るほどにイエス様の近くに生きているからです。つまり、本音丸出しで、まさに丸裸になって本気で私たちにぶつかってきてくださっているのが私たちのイエス様というお方であるということです。従って、そう考えるならば、イエス様がこうして御言葉に聞いている私たちに求めることは、ご自身がそうであるように神様との裸の付き合いであり、ああだこうだとの言い分けがましく何かを言うことではありません。なぜなら、それをしているのがまさに律法学者であり、ファリサイ派の人々であるからです。

では、彼らはどうしてそうするのか、いや、そうせざるを得ないのか、それは、神様の交わりに生きることの据わりの悪さを、何かすることによって解消しようとしているからです。そして、彼らがそうするのは、据わりの悪さを解消する方法を人々が強く望んでいたからでもありました。ですから、イエス様のここでの激しさは、そんな彼らのを排除を目的としているわけではありません。むしろ、その反対です。イエス様の嘆き、憤り、その激しさは、彼らに気づきを与え、イエス様の交わりに招くためのもので、彼らを叩きつぶそうとしてのことではないからです。なぜなら、もしそうでなければ、彼ら以上に私たちこそが救いようもない者になってしまうからです。しかし、もちろん、そうではない。そして、それは、彼らもそうです。なぜなら、彼らも私たちもイエス様と同じように、神様との交わりに生きる一人一人であることに間違いはないからです。

ですから、イエス様の荒々しさから知らされることは、聖書の御言葉の基本的な理解です。つまり、それは、神様の製造物責任ということでもありますが、けれども、楽園から追放されて以降、その神様の御心が私たち人間には分かりにくいものとなったのです。そして、この分かりにくいものを分かりやすくするために、あれこれといろいろと説明を尽くしたのが、律法学者、ファリサイ派の人々でありました。しかし、神様が私たちに求められることはそういうことではありません。神様とのの交わりに生きることであり、つまりは、そこにいることであって、何をしたり、できるようになることではないからです。神様に赦されて、その祝福の内に憩うことだけを神様は望んでおられるのです。だから、イエス様は、幼子のようにと、仰るのですが、ですから、礼拝において、また、この後に行われる聖餐式において、そこでイエス様が私たちに望んでおられることは、幼子のように神様の御前に憩うその姿です。私たちの責任を追及し、吊し上げることではありません。そして、このことは、重い障害を負ったある研究者が言っていることでもありました。その彼曰く、「責任を解除されて、人間ははじめて自ら責任を引き受けることができるようになる」とこう語ったように、責任責任と責任を追及すればそれで人は責任を担えるようになるわけではないからです。平安が約束されている交わりに生かされてこそ、人間は人間として責任ある生き方へと導かれ、まただから、イエス様も十字架につく前に、「私は、平和をあなたがたに残し、私の平和を与える。私はこれを、世が与えるように与えるのではない。心騒がせるな。怯えるな。『私は去って行くが、またあなた方のところへ戻ってくる』と言ったのをあなたがたは聞いた」とこう仰ったのです。

イエス様は、今、確かに私たちと共にあります。イエス様のいますところに、私たちも同じようにいるのです。まただから、イエス様の本音にこうして触れることが赦されているし、律法学者、ファリサイ派の人々もまた、私たちと同じようにその本音に触れることが赦されているのです。ただ、それが分からなかった彼らは、だから、彼らの方からイエス様に背を向けてしまったのです。そして、この十字架の出来事が明らかにするように、それは私たちも同じです。けれども、その私たちのもとにイエス様は約束通りに戻ってきてくださったのです。だから、私たちはそのイエス様と今一緒にいるのであり、この一緒にいるというところから始まるものが、私たちの新しい歩みでもあるのです。ですから、イエス様が一緒にいる、新しい一週間、ここから一日一日を過ごす私たちでありたいと思います。祈りましょう。